
君色空

佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君色空

【著者名】

佳

N4306A

【あらすじ】

学校でのいじめを受け、闇に閉じ込められていた私に、光を与えてくれたのは、暗闇を背負う貴方

君と出逢って、私は生まれて初めて、空の色が美しい事を知った。

下を向いて歩く私に、君は空を見ることを教えてくれた。

君は知っているだろうか。

あの時、私は空を見上げて、その眩しい青色に、どれほど感動したのかを。

そして、どれほど救われたのかを。

あの日以来、私の目に映る全ての物が色づき、輝き始めた。

君は、私を取り囲む漆黒の闇に、光を差し込み、彩りを「与えてくれた。

目を閉じれば、そこに君と見たあの青空が広がる。

そして思い出す、透き通った、果てしなく続く大きな青色が、溢れんばかりの光で、ちっぽけな私たちを照らしていたことを。

君といえば、強くなれる気がした。勇気を持てるような気がした。

君と出逢つまで、私の世界は暗闇に覆われていた。

色も無く味気のない、果てしなく闇が続くこの世界を、君が変えてくれた。

色という魔法を使って。

君に出逢えなかつたら、きっと私は昔のまま、綺麗な青色を知ることもなく、

下を向いたまま歩き続けていたのだろう。

多分、君自身なんだと思つ。闇を打ち碎いた、あの光は。

絶え間無く降り注ぐ暖かな光の下で、一人一緒にいた短く幸せだった時間は、

もう取り戻すことはできない。

だけど、君が私の世界に与えてくれた光と彩りは、

時間を超えて、いつまでも永遠に輝き続けていく。

例え一度と君に、逢えなくとも。

そして、決して忘れない、君と見た、あの青空を。

だから、心から言いたい。直接伝えられない、臆病な私を許して。

ありがとう。そして、さよなら・・・。

君が隣にいないうちは、一体どんな色をしているのだろう・・・。

「バス」

「マジでキモイ。本当にウザイよね、由理の奴」

「なんだ！ さなのが私の近くにいるの？ 消えて欲しいんですナビ」

学校の門を潜ると、こんな言葉がいつも私の周りを延々と渦巻いていた。

私へと向けられるクラスメートの視線は、いつも鋭い刺があり、

私の心に深く深く突き刺さる。一体私は何をしたのだ？

恨まれるような事をしてしまったのだらうか。

気がつけば私はクラスメイトで、世間で囁かれるのイジメとこのものを受けていた。

ブス、ムカツク、シネ、たくさんの言葉が私に投げつけられた。

たくさんの辛い仕打ちを受けた。教室には私の居場所がない。

邪魔者は排除すべき、そんな空気が漂っている。

自分に「されたはずの机と椅子までも、私に使われる」と嫌がつていてるような気がした。

窓の方を見ると、空が見えた。どんなに晴れた日でも、どんな雨の日でも、

空の色はいつも私を冷たく見下ろしていた。

私はこんな生活に絶えられるほど、強くはない。

中学まではそんなことなかつたのに、なぜなのだろう。

答えはわからなかつた。

それでも私は学校に行つた。

母を心配させたくなかったからだ。

父を私が幼いころ亡くし、女手一つで育ててくれた母に、無駄な心配をかけたくなかつた。

母を心配させるぐらになら、学校に行って辛い思いをする方が良い。

そう思つた。それでもやはり、苦しく辛いのは変わりなかつた。

イジメを受けるようになつて、一つ変わつたことがある。

それは鏡を見ることが嫌いになつたこと。

鏡に映る自分の姿を見ることが、苦痛でしおりがなかつた。

醜い自分の姿を、わざわざ鏡に映して何になるといつのだらう。

私は最低のバス。救いようもないほど醜い。

こひつかそんな風に考へるよひになつた。

そして、そんな風に思ひ自分の自分が大嫌いで。

鏡に映る姿はもぢりて、窓に映る自分の姿も、水溜りに映る自分を見るたびに、

その姿をぐぢやぐぢやに消してしまいたい。

そんな衝動が心を貫く。

それと一緒に、私自身も消えてしまえば良いく・・・。

田に田ん中の思ひは強くなり、いつしか私の心の大部分を占めこんだ。

その日も私はいつものように学校に行つた。

夏休みに入る前日だつたため、学校は午前中だけだつた。

相変わらずクラスメイトからのオコトバはあつたが、

いつもより早く学校から帰ることが出来て、心もいつもより軽やかだつた。

真っ先に教室から走り出し、校門を駆け抜ける。

校門から出れば、私は自由の身。誰からもけなされる」ともない。

足[足]される[足]ることもない。完全な自由を手に入れられる。

今日はそれがいつもより早い。足かせを外された小鳥のようになつて走る。

学校といつ監獄からの脱走路を飛ぶように走る。

走って走って、気がつけば私は隣町に来ていた。

あまり出かけることがないので、隣町のことは良く分からない。

隣町も、私の住んでいる町も、発展状況は同じくらいで、

寂れかけた町に、無意味に抵抗しているように見えた。

適当にぶらぶら町を彷徨つてると、公園に突き当たった。

昼下がりだからだろうか、誰もおらず、聞こえるのは波の音だった。
公園の先には砂浜があり、何人かの人が海水浴を楽しんでいた。
だ。

私はブランコに砂浜と向かい合わせに座り、軽くじぎ始めた。

潮の香りをのせた風が、私の長い髪と戯れ始める。

爽やかに響き渡る波音に、そっと目を閉じ、耳を澄ませた。

ここ最近、感じたことのない安らかな気持ちが、体中に染み渡り始める。

その時だつた。

「ねえ」

私は直ぐに現実に引き戻された。

心臓が急スピードで駆け上がる。

一瞬で体中の血が凍りついていく音が聞こえた。

恐る恐る田を開け、声の方に向けると、

「ラン」の隣には一人の背の高い青年が立っていた。

年は同じ年くらいだろう。右手には白い杖を握っている。

「君、ここ初めて？」

突然の質問に戸惑い、私はブランクを立つた。

そうすると彼はすまなそうな顔をして「うう」と呟つた。

「いや、別にどいて欲しいとか、そういうわけじゃないんだ。
ただ、見かけない人だから、つい……」

彼は杖を左右に振りながら、隣のブランクに座つた。

「一緒にブランクを『じゃあせんか』

それが彼との出逢いだった。

それから、私たちは一言も喋ららず、ただひたすらゆっくりとブランクをこいだ。

はたから見れば、高校生の男女が、何も言わずに「ブラン」をいじぐ、
といつおかしな情景に映つただろう。そんな奇妙な時間を、彼が言
葉で破つた。

「ビニからいらしたのですか？」

丁寧な言葉使いでの質問に、私は少し嬉しかったのか、

他人からの、それも今逢つたばかりの人の質問に、答えてしまつた。

「隣町から・・・」

ぼそりと呟く。久しぶりの、母親以外の人との会話だった。

急発進した心臓が、まだスピードを落とせないでいる。

「そりなんですか・・・。何か用事でもおありで？」

私は黙つてしまつた。イジメからの一時の開放が嬉しくて、

「ここにまで来てしまつたんです、そんなことは言えない。

適當な嘘も思いつかない。普段人と話してないからだ。

「あ、答えたくなかったら答えなくて結構ですよ。『めんなさい。』」

彼は再びすまなさそうな顔をした。私は慌てて思いつきり首を横に2・3度振った。

「いえ、あの、その・・・。私、喋るのが得意じゃなくて、あの、だから・・・。」

口こもつた様子の私に、彼は微笑んだ。

私は彼の横顔をちらりと見た。

澄んだ瞳に、端正な面持ちをしていることが、一目で分かった。

ふいに彼は持つていた白い杖でブラン口を止め、立ち上がった。

「ブラン口を、止めてもらえるかな」

言われた通りにすると、彼は私の前に立ち、杖を左手に持ち替え、右手を差し出してきた。

「僕は山田耕志っていうます。高校3年生です。よろしく」

そう言つと、彼は持つていた杖で、地面に「耕志」と書いた。

いつもの私なら、走つて逃げてしまつたに違ひない。

しかし、何故かその日だけは違つた。

これから1ヶ月の間、自由の身であることがさせたのか、

私も立ち上がり、彼の手を握つた。

「原由理つてあります・・・私も、高3」

私たちの間を駆け抜ける潮風に、少しきすぐつたさを感じる。

「もうこれで僕たちは友達だね」

嬉しそうに言いつ彼のその言葉に、私は違和感を覚えた。

トモダチ・・・？握手しただけで僕たちは友達なの？

ふざけてる。それだつたら私はとっくにこんな状況から抜け出していく。

今までの心地よさが、一気に怒りへと変わった。

私は彼の手を放し、公園の出口へと向かおうとする。

「待つて！」

彼が私を追いかけようとした。

すると彼は小石につまずき、転んでしまったのだ。私は急いで彼の元に走り寄った。

「大丈夫ですか・・・？」

彼は苦痛と笑顔の入り混じった顔を私に向ける。

「あはは。」
「れぐらーへーキ」

そう言つと、彼は突然よつんばになり、両手を地面に這わせ始めた。

「じめん。ちょっと僕の持つていた白い杖、探してくれないかな？」

私は彼の傍に倒れていた白い杖を手にとり、彼に渡した。

彼はそれをもつと、立ち上がり、ジーパンの土をはたいた。

「じめんなさい・・・。私・・・」

「ううん。僕がいけないんだから。目が見えないのに走り回としち
やつて。」

それに何か気に障るようなこと言つちやつたみたいだね。こいつこそ
「ごめん。」

彼の綺麗な瞳に、笑いがともる。

「あの、高田さんって、目が・・・」

何と言ひて良いのか分からず、再び口に口もつてしまつた。

彼は相変わらず微笑んでいる。

「そう。僕は目が見えないんだよ。杖持つてないと、そう見えないらしいんだけど」

私に向けられる視線が、凄く暖かい。

「それじゃあ、さつき、何で私に初めてつて・・・」

「ああ、それはね」

えへん、と咳払いをして、彼は続けた。

「僕は、目は見えないけど、心の眼は良く見てね、それで人の色が分かるんだよ」

彼の声から、それはふざけている様に聞こえなかつた。

「人にはその人の色があつて、皆それぞれ違つんだ。僕はそれを心の目で見る。

君の色はここで逢つた人たちの物ではなかつた。だからそう聞いたんだよ」

「色・・・？」

人の色を見る、分かりそうで分からぬ彼の言葉に、私は首をかしげた。

「そう、色。君しか持つていない色」

彼の口が、ふつと笑みを浮かべた。その仕草に、私の肩が跳ね上がる。

「そろそろ帰らないと、家に着く頃には暗くなっちゃうよ

気がつけば時計はすでに5時を回っていた。

「あ、それじゃあ・・・」

私が彼に背を向けると、後ろから彼の口から流れ出す、優しい声が追いかけてきた。

「また、会おう。僕は毎日ここにいる。気が向いたらで良いから、またおいで」

私は振り向いて彼を見た。先ほどからの微笑を絶やさず、

私に手を振っている。私は背中に暖かなくすぐつたさを覚えながら、

公園を出て行った。

第3話

あの日から、すでに1週間が経とうとしていた。

私はあれ以来、あの公園を訪れていない。

何度も尋ねようと、家の玄関まで行くのだが、ドアノブに手をかけると、

心の中のもつ一人の私が、私の手を動かなくさせてしまう。

万が一公園に居なかつたら……。

たかが他人、本当に私のことを待つてくれているなんて保障は無い。

彼のあの優しい言葉が、嘘の結晶だと分かってしまったなら……？

きっと私は傷ついてしまう。

それにまた会ったところで、私は何をしたいの？

別に会つたからって何があるわけでもないし……。

そう思つと、手が凍りついたように止まつてしまい、出かけられず
にいた。

そんな風に日々を過ぎていて、私は一つ決心をした。一度あの
公園に行こう。

それで会えなかつたら、運命だと思つて諦めれば良い。

その方が良い。せつかくの短い自由な日々を、悩んで過ぎたくな
い。

その日々が雨が降つていた。

久しぶりの大雨だった。午後にはあがると、昨日見た天気予報が言
つていた。

だから午前中に行つてしまおう。私は急いで支度をして、外に出た。

こんな雨の中だと、1時間以上はかかってしまうしそうだった。

私は傘をさして、雨の中を一人、彼がないはずの公園へと向かった。

公園に着くと、案の定そこには誰もいなかつた。私は安心した。

これで、もう傷ついたりしなくて済む。

しかし一方、どこか寂しいような気がした。

昔、大切にしていたくまのぬいぐるみを、

母に怒られた時に投げてしまい壊してしまった時を思い出す。

雨は相変わらず強く、私の傘を叩き続けている。

ふう、と軽くため息をついた。分かりきっていた。

私のことなんか、待っていないことなんて。

公園を出ようと、出口の方を向いた、その時だった。

「来てくれたんだね」

出口には、傘を差した彼が微笑みながら立っていた。

「忘れられたかなって思ったよ」

彼が私のほうに向かって歩いてくる。

思いもよらない彼の姿に、この前感じたくすぐったさを、背中に感じた。

「ありがとうございます。しかし今日は生憎の雨だね。でも午後には上がるって聞いたから、

少し公園の近くにある喫茶店で、雨宿りをしませんか？」

耳に響く雨の音が、次第に弱くなっていた。

降り注ぐ雨粒に、彼の優しい一言、一言が戯れ始める。

「・・・はい」

私の返事に、彼は続けて言ひ。

「それじゃあ、行ひ」

私たちは一人同じ足並みで、そろつて公園の出入口を抜けた。

「いじてね」

公園から歩いて1分もかかるない所に、その喫茶店はあった。

古びた感じのその喫茶店の扉を開けると、そこには、軽やかなベルの音が響いた。

「おう、耕志じゃねえか。いらっしゃい」

中の雰囲気は、まるで昔読んだ童話に出でてきやうな、レトロでお洒落な感じだった。

カウンターには黒い淵の眼鏡を掛けた中年の背の高い男性がグラスを拭いていた。

その前にはスーツを着た初老の男性がコーヒーを飲んでいる。

「今日は連れがいるんですねえ」

初老の男性は「ちらりを向いて、笑いながら言った。

その言葉に、彼がはにかむ。お店の中は、昔どいかで感じたような、

懐かしい暖かさで満ちている。

「僕はいつもの。君は何にする?」

「私は・・・アイスティーやで」

「マスター、アイスティーもよひしへ」

彼はそう言つと、一歩一歩ひたすら手招きをしながら、

席の方へと歩いていった。ここには来慣れているのか、彼は杖を使わず真っ直ぐ歩いていく。

私たちが座った席は、大きな窓に向っていて、

そこには、公園から見えた砂浜と海が、大きく広がっていた。

外からは、かすかに潮の引く音が聞こえる。

私は極力外を見ないようにした。

「僕はここマスターと知り合いでさ」

にこにことしたその笑顔に、私の世界に存在するあの闇は見えなかつた。

「小さい頃、マスターの子供とよく遊んでてね。本当にお世話をなつたんだ」

「コーヒーとアイスティーが運ばれてきた。マスターがぽんと彼の背中に手をかける。

「本当にだよ。ここにはいたずらっ子でねえ。何度迷惑をかけられたか

ははは、と笑つてマスターはカウンターに戻つていった。

彼は少し恥ずかしそうに、コーヒーをすすつた。その姿が可愛らしく、

思わず口元がゆるんだ。それを見た彼が、嬉しそうに言つた。

「やつと笑つたねえ」

彼はもう一口コーヒーを飲む。私はその言葉に少し困惑つた。

「君は哀しそうな色をしている。今にも壊れてしまいそうな、そんな色」

心臓がどきり、と彼に聞こえてしまいそうな、大きな音を出した。

「僕は、田は見えないけど、心の眼は誰よりも見える」

カラソカラソと、グラスの中の氷が溶けていく音が、心に響く。

「晴れてきたね」

彼は窓の方を見た。いつの間にか雨は上がって、夏の太陽が、顔を出していた。

「君は一人じゃないよ」

薄暗かつた喫茶店に、光が差し込む。空中の埃が、光の中をキラキラと舞い踊る。

「ちょっと外に出ない？」

「え？ でも入ったばかり・・・」

「大丈夫。また後でマスターに頼んで紅茶を入れなおしてもらおう。マスター、ちょっと外に出るから。また戻ってくるんで」

彼は強引に私の手をとつ、出口へと歩き張つていく。

「おひ。 分かつた」

チリンチリンという音と共に外を出た。太陽の光が日を貫く。

彼は相変わらず私の手を引き、店の裏側へと回った。

そこにはさつき窓から見た砂浜と海があった。

「空を見て」らん

彼は空を見上げていた。私も同じように空を見る。

雲一つない真っ青な空が、そこにはあった。

「君にはこの空がある」

彼が握る手に、少し力が入る。

「辛かつたら、上を向いて空を見るんだ。下を向いてばかりこひや
駄目だよ。

あつといの空が、君を包みこんでくれる

無限の広がりをもつ、透明に輝き渡る青色が、私たちを包み込む。
私は目を閉じた。心の底に眠っていた何かが、私の目に込み上げて
くる。

「僕は8歳の時に視力を失った」

彼は微笑んだまま話し続けた。

「暗闇の中、僕を救ってくれたのは、最後に見た大空の青色だった。
果てしなく続くあの青色が、僕を闇の中から救い上げてくれた」

私の中で何かが切り裂かれた。それと共に、私の中で、暖かな何か
が広がり始める。

「僕たちは小さ過ぎる。だから色々な困難に耐え切れぬほど強さ
はない。」

それなら、その困難は、代わりにこの空に肩代わりしてもうおつむ

溢れ出すそれが、絶え間なく頬をつたう。

隠していた何かが、少しだけ顔を覗かせる。

「僕も小さくけど、ほんの少しほ役に立てると思つかう

繋いでいた手を離すと、彼は私の頬に手を当て、涙を拭った。

「ねえ、この空が今、どんな色をしているか、教えて

目を開けて、もう一度空を見る。溢れ出す涙に滲む青空が、私たちの前に優しく広がる。

「凄く綺麗・・・」

自然に顔から笑みが零れた。ふわり、と彼の手が私の頭の上に置かれる。

「ありがとう

澄み渡つた青色が、穏やかな光で海を照らしていた。

第4話

それ以来、私たちはその公園で会つようになった。

公園のブランコに乗つて空を見上げる「」が、

あんなに最高に退屈な幸せを感じる「」ができるなんて。

雨の降る日は、喫茶店で何時間も他愛無い話題に、夢中になつた。

彼は沢山の事を知つていて、それら一つ一つを、丁寧に話してくれた。

通つてこる高校のこと、友達のこと、昨日の夕飯のこと、社会問題のこと、

そして、彼が失明した理由も。

彼はまるで天氣の話をするかのような口ぶりで言つた。

「僕た、小さい頃から空が大好きで、空を見上げながら歩いていた

ら、

車に引かれちゃつて、それで視力を失つたんだよね」

それを聞いて何を言えば良いのか迷つていると、朗らかな笑い声が返ってきた。

「君ところと、何でも話したくなつてしまつんだ。何故だろうね」

彼の優しさが奏でるその笑顔、その声に、私の心の闇は消え始めていた。

まるで、暗闇を照らす光のよつて、彼の全てに眩しさを覚えた。

彼と一緒に見る物は、すべてが彩られ、眩いほどの光を放つ。

空も、海も、砂浜も、全てが美しかった。

時々私たちは人の少ない砂浜に寝転び、空を見上げた。

そして、その度に私は祈つた。この時間が、永遠に続きますように、
と。

彼の傍にいたい。

ずっと、ずっと。

この安らぎを、こつまでも味わってみたい。

そんな想いが、私の心を占め始めていくのに、時間はからなかつた。

その代わりに、私の中の暗闇は、全て消え去ってしまった、完全な自由を手に入れた、

そう思っていた。

それが、単なる白じの願望であるに過ぎないことも知らずに。

夏休みも残るところ1週間となつた日、私が公園に行くと、彼はまだ来ていなかつた。

いつもならあるはずの笑顔が、そこにはないことに、胸が締め付けられる。

そんな日もあるよね、と自分に言い聞かせ、

しばらく一人で「ラン」を「」で「」と、彼が公園の中に入つくるのが見えた。

氣のせいだらうか、いつもより元氣がないように見えた。

「おはよう。どうしたの？ 私より遅いなんて。珍しいね。」

私はブランコを止め、彼のそばに駆け寄った。

私の声に、彼はいつものように笑顔で答えた。

少し無理の混じった笑顔で。

「うん。寝坊しちゃって。本当にめん。待つた？」

「「ううん。全然」

彼はゆっくり歩いて、ブランコの上に腰掛け、そして何も言わずにじき始めた。

優しさの宿るその眼差しの先には、私には見えない何かがあった。

じまじくの間、私と彼は沈黙の中でブランコをじき続けていると、

彼がブランコを止め、立ち上がった。私もブランコの勢いを弱めていふと、彼が口を開いた。

「由理さん」

彼の声に、いつもの穏やかさが聞こえなかつた。

あるのは、緊張に強張つた言葉の羅列。

「話せなきゃいけないことがあるんだ」

切なげな瞳に、心がぎゅっと縮む。

「……どうしたの？」

嫌な予感が胸をよぎる。熱い血が体中を駆け巡った。

「……今度、田の手術を受けると思う

彼が溜息混じりに答えた。私はブランコを止め、彼の隣に行つた。

「僕さ、完全に見えてないわけじゃないんだ」

彼は空を見上げた。いつもと同じ、綺麗な空があった。

「光の加減とかは、ちゃんと感じることが出来るんだ。だけどね……

」

彼が下を向いた。彼がいつもより小さく見えた。

「僕の主治医の先生によれば、この手術は、成功する確率が低いらしい。

成功すれば、目が確実に見えるようになる。失敗すれば、光さえも失ってしまう。

でも、この手術を受けないと、僕は一生目が見えないまま・・・。だけど、もし失敗して光まで失つてしまつのが怖い。本当の暗闇になつてしまつのが、すごく怖い」

彼が両手で顔を覆つ。その手が小刻みに震えていた。

「・・・田が見えるよう・・・」

私の心に、消え去つたはずの闇がじわりと広がり始める。

彼の目が見えるようになる。彼の目が見えれば、私の本当の姿も・・・。

醜いこの姿を見せなければならぬ・・・私は頭を振つた。

彼は「ブス」なんてきつと言わない。絶対言わない。

彼は優しい。私にそんなこと言つはずないじゃない・・・でも・・・。

「でも、僕は君と一緒に空を見たい。海を見たい。砂浜を走りたい。そして……」

彼の手が、私の手の甲に重なった。胸の奥が、じわりと熱くなる。

「こんなにも美しい色を持つ、君をこの目に映したい」

痛いほど正直な彼の言葉が、矢のようになに私の心に突き刺さった。

射抜かれた心は、深紅の涙を流し始める。

彼の目が見えるようになつて欲しい、でも、その時に私は……。

「君の色は、よく見ないと、見えないんだ」

私に向けられるその微笑みが、悲しかった。

「君の色は、外からのいろんな色に覆われている。それもほとんどがドロドロした、汚い色に。」

でもね、それらの奥に、僕は見たんだ。今まで見たこともないような、美しい空色を。

君にしかない、僕が視力を失う前に見た、あの空よりも、広く澄ん

だ空色を

彼の握る手に力が入る。握り返したい。しかし手に力が入らない。

「1週間後、町立病院に来て欲しい。

1番初めにこの目に映すのは、この世で一番美しいのが良いから」

私は彼の手を思い切り振り払った。そして、聞こえないような声で
呟く。

「・・・元気で・・・。手術の成功を祈っています」

私は駆け出した。全速力で公園を走りぬけた。

胸に溢れる熱いものを、零してしまわぬように。

背後から私の名前を呼ぶ声が聞こえた。私は振り向かない。

君はきっと言わない。

でも、それでも、私は怖い。

またあの暗闇の中に戻つてしまつよつな氣がして。

君は思うかもしない。

何で「ブス」な女なんだろうつて。

そして後悔する。私と一緒に過げしてしまつたことを。

それが現実になつた時、私はどうして良いのか分からぬから。

私は走つた。

今までの彼との全てを、振り払うかのよつて。

町を囲む大空が、真紅に染まり始めていた。

まるで、止めどなく溢れ出る涙色が、心を蝕んでいくよつて。

第5話

私は真っ暗な底の中にいる。

この底には始まりも、終わりもない。

周りは何も見えず、何も聞こえない。

哀しく広がる暗闇だけが、この世界を支配する。

手探りで前に進もうとした。しかし、周りは暗く、上手く前に進めない。

どんなに歩いても、やついた場所と変わっていないような気がする。

しばらく歩いた後、とうとう疲れ果て、冷たい地面に座り込んだ。

「助けて・・・誰か・・・助けて!」

声の限りに何度も助けを求めて叫ぶ。

しかし、帰つて来るのは、空しく響く自分の叫び声。

その後に押し寄せる沈黙に、泣き叫びたくなる衝動を抑え、膝を抱えた。

もう、だめ。私は一生、この底から出られない。そういう運命と決まっているんだ。

顔を膝に埋めた、その瞬間だった。

「もう、大丈夫。」

頭上から声が降ってきた。顔を上げてみる。

優しさに満ち溢れたその声に、色を失ったこの世界が、彩りを思い出す。

四方に広がる暗闇に、一筋の光が射し込んでいた。

その眩しさに、思わず目を瞑ってしまう。

私はその光の射す方向に、ゆっくりと右手を広げてみた。

手の平に広がる一点の光が、次第に大きくなつていいく。

どんどん、どんどん大きくなつていき、気がつけば右手をすっぽり覆うぐらになつていった。

私は怖くなり、ぎゅっと右手を閉じた。

それと同時に、差し込んでいた光も、弱くなつていいく。

ゆっくりと、ゆっくりと、か弱い光へと・・・。

「待つて!」

「大丈夫?」

心配そうな顔をしている母が、私の顔を覗き込んでいた。

家に帰り、泣いていたら、いつの間にか居間のテーブルの上でうた寝をしてしまったようだ。

そこに、仕事から帰宅したままの母が、寝ている私を見つけたのだろう。

よほどどうなされていたのか、こんなに不安そうな顔をする母を見たのは初めてだった。

心臓が走った直後の様に鼓動を打っているのを感じる。

冷たい汗が、背中の上に細い道筋を作る。

「うなされていたみたいだけど・・・」

母が私の頭に右手を乗せて、くしゃくしゃ、と搔く。

その仕草に、計り知れない安堵が沸く。

「うん。大丈夫」

懸命の笑顔に、母は安心したのか、手に持っていた鞄をテーブルの上に置いた。

「良かつた」

そう言つと、母は夕食の用意のために台所へと向かつた。

私は恐る恐る右手を開けてみる。

そこには無数の汗の粒が浮かび上がっていた。

履いているジーンズに手をこすりながら、カーテンを閉めにいく。

外からはチリーン、チリーン、と鈴虫の鳴き声が聞こえた。

短い夏が、もう終わりを告げよつとしていた。

「由理」

背後から母の声が聞こえる。私の答えを待たず、母は続けた。

「辛い事があるなら、お母さん、いつでも力になるから

母の方を振り向いた。母は相変わらず、夕飯の支度をしていく。

その背中が、いつもより広く感じられた。

「・・・お母さん」

私は母に近づき、背中をぎゅっと抱きしめた。

久しぶりに感じる母の温もりは、誰よりも強く、暖かかった。

「ありがとう。でも、大丈夫だよ」

母も私も、後は何も言わない。

ただゆっくりと、時間がだけが過ぎていった。

さつも見た夢を思い出す。

何故、光は完全に消えなかつたのだろう。

その答えが、少し分かつたような気がした。

彼と別れてから、時は無機質な音と共に、私を追い立てて来た。

季節は変わり、とうとう冬も終わりを迎えるとしている。私の高校生活も、幸いなことに、あと数週間足らずで幕を閉じようとしていた。

春になれば、また新しい場所で、新しい生活が始まる。

私はクラスの大半が進学する付属大学を避け、隣の県の大学へ進学が決まっていた。

彼とは、あの別れた日以来、一度も会っていない。

彼の手術が成功したかどうかも、私には分からぬ。

ただ、彼の手術はきっと成功している、と妙な確信を、私は抱いている。

特別勘が鋭いって訳じゃないけど、多分これだけは当たっている。

きっと彼は、あの美しい目で、大好きな空と海と砂浜を眺めていることだらう。

彼が幸せになってくれれば、それで良い。

彼の目には、美しいものだけが映しだされなければならない。

間違つても私みたいな「バス」女は、彼の目の邪魔になるだけ。多分これで良かつたんだと思う。私は間違つた選択をしていない。間違つた選択は・・・。

相変わらず教室の空気は私を排除しようとするものだけど、いつの間にか気にならなくなつた。

嫌な言葉を投げつけられても、それらは私の耳を通り抜け、すっと空へ向かつ。

それでも時々、どこかに引っかかってしまうこともあった。

そんな時、私はいつも、空を見上げる。

もうあの時の暗い空はない。

そこにはいつも私の全てを受け入れてくれる、あの暖かな空がある。

しかし、彼と一緒に見た空の色と、どこかが少し違う気がした。

一人で見るそれは、あまりにも広大で、十分すぎた。

彼の姿は、ピンぼけした写真のように、ぼんやりと映し出され、そして僅く消えていく。

どんなに思い出しても、それは変わらない。

あの時感じていたぬくもりも、彼の優しさも、全て過去となつてしまつたのだろうか。

もうあの頃には、戻りたくても戻れない。

君の声も、君の姿も、全てが想い出となり、心の奥深くに眠り続けていく。

それが、もしかしたら、私が迎えられる、最高のハッピーハンディングかもしれない。

君がくれた彩りも光も、ずっとずっと、忘れないから。

そして、ひとつひとつ、卒業式の日を迎えた。

周りの皆は嘘で出来てこる涙をたくさん流し、卒業といつ別れに、思いを馳せている振りをしてこる。

私は早急に式場を出て、学校を出た。

深く深く、胸に入りきらないほど息を吸つ。

やつと完全な自由を手に入れた。

もう一度と念の上りともないだらけ。

やつと息を吐き出した。

まだ寒さの残る夜に、微かな雲が立ち上る。

クラスメイトたちに、私はサヨナラを告げる。

そして私はある場所へと向かった。もう一つのサヨナラを書つ為に。

チリンチリンと鳴り響くその中は、あの時以来何も変わっていなかつた。

「いらっしゃ……君は、耕志の……」

彼と何度も訪れた喫茶店も、彼と別れたあの日以来である。

私の声に、スーツを着た初老の男性が、読んでいた新聞から顔を上げた。
そして優しく微笑んだ。

その微笑に、少しの戸惑いを感じる。

店内をぐるりと見回す。そんな自分が、あまりにもおかしくて笑えない。

今日でこの想いを終わりにする。そう決めたんだから。

「良く来たね」

私があの時、彼と一緒に座った席にいると、マスターが紅茶を出してくれた。

「・・・耕志とは、もつ違つていないとだらう?..」

マスターは私の前に腰を下ろした。そして深いため息と共に、言葉を吐き出す。

「今、あいつ、元氣がないんだ・・・。あんなに元氣のないあいつを見るのはあの時以來だな・・・ねえ、あいつが何で目が見えなくなってしまったか、知つているかい?」

マスターが窓の外を見た。冬の残が残る窓に、微かな春の香りを乗せた光が、駆け巡る。

「窓を見上げながら歩いていたら、車に跳ねられたって・・・」

「・・・やつぱりな」

そう言つと、マスターは胸ポケットから一枚の写真を取り出して、私に見せた。

そこには幼いころの彼と、同じ年ぐらいの少年が楽しそうに笑つている。

見知らぬ少年は、片手に白い杖を持っていた。

「あいつの目が見えないのは、俺の息子のせいなんだよ。俺の息子は先天的に目が見えなくて。

その息子が道に飛び出してや、それをあいつが助けようとしたんだ」

私を囲む空気が凍る。彼はあんなに明るかつたのに、私よりも暗い闇を背負つていたなんて。

「俺の息子は、結局助からなくてね。耕志は友達と視力を、一瞬で失つてしまつた」

温かな紅茶に、少量の塩水が落ちた。ぽちや、という音が、むなしく店内に響き渡る。

「だから、もう2度と、あいつに失つてもらいたくないんだよ。大切な何かを」

無意識に手に力が入つた。ぽちや、ぽちや、と塩水が紅茶に入つては、飛び跳ねる。

「・・・私、あんな酷いことをしたのに、もう、無理ですよ。遅すぎますよ・・・」

今まで隠してきた想いが、一気に込み上げて来る。それらは舌の上に乗り、言葉にならず、消えていく。

椅子から立ち上がり、私は出口へと向かった。

ドアノブに手をかけた瞬間、カウンターに静かに座っていた初老の男性が立ち上がり、口を開いた。

「遅すぎるなんて、この世には存在しないんだよ。それは単なる君の想い込みに過ぎない。

まだ間に合つものまでを、諦めても良いのですか？」

私は驚いて、立ち止まってしまった。その男性は私に近づいてきて、私の耳元で囁いた。

「『やつておけばよかった』の気持ちは意外と厄介なものですよ」

たくさんの皺が刻まれた、大きな両手が、私の手を包み込む。

「行きなさい、あの公園に。もつあなたは気が付いている筈です、自分の正直な気持ちに」

彼の強い瞳に、私は何も言えない。

私は小さく頷き、店を出た。ドアベルが心地よく鳴り響く。私の背中を、そつと押すかのよう。

「先生、耕志はちゃんと彼女に気がつくんでしょうか。実際、あいつは見たことがないんでしょう・・・？」

マスターが心配そうに呟く。先生と呼ばれたその男性は、カップに手をかけながら答えた。

「あの二人なら、きっと大丈夫ですよ」

満足そうに、言いながら、彼は持っていた新聞を読み始めた。

「先生、耕志の田を治してくれて、本当にありがとうございます。改めて礼を言わせてくれ」

その男は、はははと笑つて言つた。

「彼だから、成功したんだと思います。『やつておけばよかつた』と思いたくない、と
彼が言つたんですか？」

男性は立ち上がり、窓辺に向かつた。そして、ポツリと呟いた。

「一人には幸せになつてもらいたいですね・・・」

ずっとビサビサと、鏡に映る自分の姿が嫌いだった。

それはクラスメイトから「ブス」と言われているぐらいの、醜い自分を見たくないから、そう思い込んでいた。でも現実は違う。

それは単なる思い込みに過ぎなかつた。

本当は、自分の正直な気持ちから田をそらしたかっただけだった。

「ブス」と言われて哀しむ自分が嫌だった。

乱暴に言葉を投げつけられて、それに抗うことが出来ず、ただうつむくだけの自分が情けなかつた。

そして鏡に映るそんな自分を、見ることが怖かつた。

見てしまえば、全てを受け入れなければならなくなる。やつ思つたから。

そして、もつと怖かつた。汚れを知らないその瞳に、こんな私を映してしまつのが。

だから私は全てに背を向けて逃げることにした。

逃げることが、イジメという監獄からの、

そして惨めな自分からの、唯一の脱出方法だと考えたから。

私は逃げること以外、何も出来なかつた。

いや、しようとしなかつた。

だから私は、逃げてしまつたのだ。

素直な私の心を、全て受け止めてくれる所からさえも。

でも今は違う。君は教えてくれた。

勇気を持つことの大切さを。忘れかけていた光を、君が先の見えない暗闇に与えてくれた。

サヨナラの前に、この言葉を、直接君に伝えたい。

「好きだよ。」

公園への道を全力で走り抜けた。

澄みきつた空に浮かぶ真っ白な雲が、もっと速く走れと言わんばかりに、私を追い立てる。

海からの穏やかな潮風が、空からの光と舞い踊り、優しく背中を押してくれた。

公園に彼の姿はなかつた。

私は上がる息を抑えながら、よろよろした足でブランコの方に向かつ。

半年振りの公園だった。

「」私は彼と出逢つた。
あれが全ての始まりだった。

ブランコに腰掛ける。

ブランコの鎖に手をかけ、地面を軽く蹴つた。
「」、といつ音が、心に切なく反射する。

私は上を向きながら、ブランコをこじ始めた。
やつぱり、逢えないみたい。

張り詰めていたものが、一気に解かれてしまつた。

目から涙が一粒零れ落ちた。

すると、ぱたり、ぱたり、と次から次へと流れだし始める。クラスメイトへのサヨナラは、あんなに簡単だつたのに、どうしてこつちは上手く行かないのかな・・・。

ただ、伝えたいだけなのに。

聞いてもらいたいだけなのに。

私は空を見上げた。

涙が、零れないように。
それでも涙は溢れ出す。

言葉にならない彼へのサヨナラが、結晶と化したかのよう。

涙を拭こうと、制服のポケットからハンカチを取り出そうとした、
その時だった。

「僕が君に逢うと、君はいつも泣いているね。」

あの優しく響く旋律。

何もかもを包んでくれる、暖かい眼差し。
顔を上げると、そこには彼がいた。

「久しぶりだね、由理さん」

相変わらずの笑顔がそこにはあった。

彼の右手に、もつ白い杖が握られていなかつた。

「見えるように、なつたんですね・・・。良かつた」

私は座つたまま下向き加減で言つた。

伝えたい言葉がたくさんあるのに。

それでも口をつべのはそんな言葉。

彼の目を直接見ることができなかつた。

見てしまえば、言葉よりも先に、泣いてしまつ、そう思つたからだ。

すると彼は、いつの間にかブランコの周りに立てられた、小さな柵を飛び越え、私の方に近づいてきた。

そして私の前にしゃがんで、いつ言った。

「今日、僕は卒業式だつたんだ。君もそつだつただろう?」

彼の視線があの時と変わらない。凝り固まっていた心が、ほぐれて行く。

「今日僕は、高校の卒業と一緒に、勇気の無い自分から卒業しようと心に決めてたんだ」

違う、貴方に勇気が無いなんてそんな事・・・。
それらの言葉を言いかけて止めた。彼が立ち上がった。

「顔を上げてくれる?」

私はためらつた。怖い。

今顔をあげれば、見られてしまつ。
この醜い私を。

でも、どつちにしたつて、彼が私を許してくれるはずがない。
そうだ、私は伝えなきやいけないことがあるんだ。
言わなきや、帰れない。私は思い切つて、顔をあげた。

彼の綺麗な瞳の中に、泣き顔の私が写っていた。

「・・・思つて いた通り」

彼は立ち上がり、私の頭にぽん、と手を乗せた。

「誰よりも美しい瞳。端正な顔立ち。水のよつに艶やかな黒髪。」

彼が優しく頭を撫でる。私の目から、再び涙が零れた。

「だから、もう泣かないの」

そつと彼はまたしゃがみこみ、両手で私の頬を押さえた。

「僕は君の笑顔を見たい。だから、泣かないで」

その優しさが、余計に私の心の栓を緩めてしまつてしまつてこと、元々、彼は気がついていない。

蚊の鳴くような声で、私は言った。

「「」あんね・・・

彼が微笑みながら、私の頬をつたう涙を拭つ。

「謝る必要なんて無いよ」

そう言つと、彼は再び立ち上がり、私の右手を両手で握つた。

「立つてもらひつても良いかな」

言われるがままに立ち上がつた。

穏やかなその瞳に、吸い込まれそうになりながら。

「目が見えるみひになつたひ、まおひじ想つてたことがあるんだ

彼はそのまま手を離さず話を続けた。海に舞う潮風が、私たちの間を通り抜けていく。

「初めて出逢つたあの日から、君の色を見たあの瞬間から、君のことが好きなんだ」

その瞬間、時が止まつた。波も、風も、雲も、全てが動きを止めた。

「・・・え・・・」

私の思考回路まで、凍り付いて動かなくなつてゐる。

今、彼はこう言つた。キミノコトガスキナンダ・・・。

「僕は怖かった。

自分の想いを口にすれば、君を傷つけてしまうんじゃないかな
ずっと怖くて、勇気が出なかつた。

でも、それは違う。

君を傷つけて怖かったんじゃない、君を失つた時に自分が傷つくな
が怖かつたんだ。

でも、それじゃ駄目だって、先生にも言われた。

だから、今日僕は君に伝える

彼が大きく息を吸う。

「僕は君のことが好きだ。

だから、もし良ければ、君の傍に、ずっといさせてもらえないかな

凍り付いていた思考回路が、動き始めた。

それは、私が一番君に伝えたかった言葉。
それを君が口にした。彼の手を強く握る。
あの時、握り返せなかつた手は、今の方がずっと暖かい。

「私も、私も・・・」

胸から溢れ出す想いの一つ一つが、舌の上で言葉になり損ねていく。

そんな私を見て、彼は微笑みながら両手を私の首に回した。

「ずっとずっと、君色の空を見ていきたい

暖かい香りが、私の全身を力強く包み込む。

それは、あの日見たあの大空よりも暖かく、
あの日私の闇を裂いた光よりも、優しかつた。

「私も、ずっと・・・」

真つ暗だつた底の中に、か弱い光が私の右手に注がれるのを感じた。

夢の中で感じた、あの光が、再び私の元に帰つて來た。

そつと手の平を開けてみる。

その光は次第に強くなり、気がつけば私の全身を包み込んでいた。

私は立ち上がり、両手を広げ、上を向く。

降り注ぐ光を全身で受け止めた。

柔らかい色彩が、辺りに咲き始めて行く。

一点の陰もない、暖かな光に溢れた世界が、そこにはあった。

そしてその世界には、最高の美しい空が、永遠に消えることの無く、無限に広がっている。

君色に染まつた、美しい空が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306a/>

君色空

2010年10月13日23時49分発行